

## 第8章 音注・日本語本文における長音

### 1. はじめに

本章は、『捷解新語』における長音の仮名表記、及びハングル音注、音注配置について、日本語学習書としての規範性・統一性の解明を中心に考察を行ったものである。その結果、長音の仮名表記「～う」と「～お」に、ハングル音注「～우」('u)と「～오」('o)が規範的に対応していることが指摘できる。また、形容詞連用形のウ音便の長音部分は仮名表記でもハングル音注でも同様に表記されない傾向がある。特に、「多う」「残り多う」の長音は、改修本、重刊本でも改訂されず長音無表記の仮名表記及びハングル音注が用いられる。

また、長音の音注配置は日本語本文の仮名文字とハングル音注とが一对一相対の形式を規範としていることが指摘できる。特に、長音の場合は語形のゆれや仮名遣いの誤りがあっても、仮名文字に対してハングル音注が一对一相対を固く守っているのが特徴的である。

このように、長音の仮名表記「～う」と「～お」に、ハングル音注「～우」('u)と「～오」('o)が機械的に対応していることと長音の誤りの例や長音無表記の例が見られること、長音の仮名文字に対して音注配置が一对一相対を規範としていることについて、『捷解新語』が「朝鮮語母語話者のための日本語学習書」という観点から調査・考察を行うことにする。その結果、『捷解新語』が朝鮮人の手になる朝鮮人のための日本語学習書という性格から、日本語の長音拍の実態把握に苦心しながらも、朝鮮語の音韻体系及びハングルの表記原理になじんだ朝鮮人学習者に日本語をより効果的に学習させようと可能な限りの規範性・統一性に基づく仮名表記及びハングル音注、音注配置を用いたものと解釈される。以下では、その具体的な例を取りあげ、調査、分析を行う。

## 2. 先行研究と問題提起

長音の仮名表記及びハングル音注について、森田(1973)では、原刊本におけるハングル音注の長音音節の表記をウ段及びオ段に分けて説明している。まず、日本語本文の仮名表記について、長音表記の場合を除外して、大体に表音的であって、統一した表記が用いられていると指摘している。

長音表記の場合は右(本論文では「上」：筆者注)と違って、ウ段・オ段ともに歴史的仮名づかいによるものがはるかに優勢である。

にうくわん(入館、一20ウ)	めづらしう(珍、三4ウ)
みやうにち(明日、一27オ)	やうじやう(養性、一33オ)
とうぜん(同前、四4ウ)	よう(良、八4オ)
てうせん(朝鮮、三15ウ)	けう(今日、一8オ)
せうし(笑止、十24ウ)	

ただし、混乱した例もあるのであって、きれいに統一されているわけではない。

<u>とう</u> く(道具、九19オ)	<u>こう</u> (斯、八6ウ)
申 <u>そう</u> (七15ウ)	<u>きやう</u> りやう(教令、八11オ)
<u>しやう</u> りう(笑留、十8オ)	

特に副詞「斯う」「さう」やラ行四段動詞に助動詞「う」のついた「一らう」などは、ほとんど全部「こう」「そう」「一ろう」と記されている。

(森田(1973, p226-227))

また、長音のハングル音注について、以下のようにまとめている(森田(1973, p. 2

40-244)：以下は筆者が改めてまとめたものである)。

### ○ウ段長音音節

・iu から転じたもので、二様に表記される。

(a) しんちう sin-cyu- 'u(心中、九12ウ)

(b) ちうしん ci- 'u-sin(註進、十16オ)

### ○オ段長音音節

・(a) au から転じたもの：やうじやう yo- 'u-zyo- 'u(養性、一33オ)

・(b) oo から転じたもの：とうい to- 'o- 'i(遠い、一22ウ)

・(c) ou から転じたもの：いつそう 'it-so- 'u(一艘、一11オ)

・(d) eu から転じたもの：まるせう ma-ru-syo- 'u(一26ウ)

また、(d)の特異例として(e)(f)の例をあげる。

・(e) てうせん tyo- 'u-syən(朝鮮、五13オ)

・(f) てうせん cyo- 'u-syən(朝鮮、三15ウ)

以下では、日本語本文の長音表記「～う」「～お」\*1とハングル音注との対応について考察する。そのためにまず、森田の分類によるオ段長音音節の中の(b)(c)を中心に考察を行う。それ以外の場合は、全て拗長音となるもので、これらウ段長音音節の(a)(b)とオ段長音音節の(a)(d)(e)(f)は拗長音としてまとめて述べる。

一方、これまで見てきたように、日本語本文の仮名文字に対してハングル音注が一对一相対の「真横表記」を原則としている。また、撥音、促音、舌内入声音(t入声)、拗音の場合は仮名文字に対してハングル音注が二対一、または三対一相対の「ずらし表記」が用いられていることがわかっている\*2。日本語本文の仮名文字に対してハングル音注は「真横表記」の均等配置を原理としている。しかし、日本語本文の長音に対するハングル音注は、一对一相対の「真横表記」で示されるものの、短音の場合と異なるいくつかの問題点が存する。

- 1) 長音の仮名表記「～う」と「～お」にハングル音注「～우」(' u)と「～오」(' o)が機械的に対応している。
- 2) 長音の仮名表記「～う」と「～お」の仮名遣いの誤りの例が多数見られる。
- 3) 長音部分は仮名表記でもハングル音注でも表記されない傾向がある。
- 4) 特に、「多う」「残り多う」の長音は、改修本、重刊本でも改訂されず表記されていない。

### 3. 長音及び拗長音の音注配置

以下では、『捷解新語』における長音の仮名表記、及びハングル音注、音注配置を中心に調査・考察を行い、朝鮮人のための日本語学習書である『捷解新語』の長音をめぐる規範性・統一性のあり方を明らかにする。

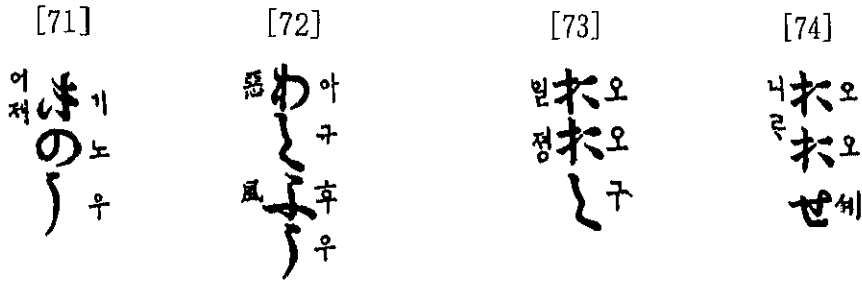
本節では、まず、長音及び拗長音の音注配置を中心に調査・考察を行う。

#### 3.1. 長音の音注配置

長音「～う」「～お」の音注配置は、直音の例と同様に日本語本文の仮名一文字に対してハングル音注一文字が均等に配置されており、一対一相対の「真横音注」を原則としている。

以下の①の例は、長音「～う」は「～우」(' u)として、長音「～お」は「～오」(' o)として一致していることを示している。

①기	노	우	아	구	후	우	오	오	구	오	오	세
き	の	う	あ	く	ふ	う	お	お	く	お	お	せ
(昨日, 改一1ウ)			(悪風, 改一19オ)			(多く, 改五18ウ)			(仰せ, 改二10オ)*3			
(下線は筆者注、以下同様)												



日本語本文の仮名表記に対するハングル音注は『捷解新語』における長音の全ての例においても①の例のように統一性が守られている。歴史的仮名遣いによる「あ」「かう」「さう」「たう」「はう」「まう」の表記が用いられる場合でも、「おう」「こう」「そう」「とう」「ほう」「もう」の表記が用いられる場合でも、両者ともにハングル音注では-o' uとされている\*。

また、長音の音注配置は日本語本文の仮名一文字にハングル音注一文字が均等に配置されており、「かうつけ(上野)」「こうもく(公木)」、「さうさ(雑作)」「そう(相)」、「たうり(道理)」「とう(如何)」、「はう(方)」「ほう(報)」等の例がともに「真横音注」になっている。

なお、日本語本文に漢字の草体「候」「申」等が見られるが、「候」「申」の草体一文字に対してハングル音注二文字、または三文字が用いられる。即ち、日本語本文の「候」「申」草体に対してハングル音注 soro, mousi(以下の b の例)が用いられているが、この場合はハングル音注の文字の間隔をつめて一つの単位として日本語本文の真横に配置させている。特に、「申」(もうし)の場合はハングル音注「모우시」mo-' u-siとして用いるべきものであるが、『捷解新語』ではハングル文字体系に存しない mou-si を用いている。ハングルの文字体系において mou のように母音 o に母音 u の綴りは表記不可であるが、さらに mou に si を付属させた形にして、mou-si を mousi のように一文字(一つの単位)化することによって、草体「申」に対するハングル音注の専用表記としている。これは日本語本文に対するハングル音注が一对一相対であることを大前提としたものではないだろうか。また、日本語本文の「申」(もうし)の音注に用いられる裸の母音「ㅜ」u がハングルの文字体系を犯した形だとしても、長音「우」' u のように長音の拍を示すことを優先させた一

つの記号としてとらえられたことは充分考えられる。

- a もうさ～：すべての例が mou·sa として統一している。
- b もうし～：mousi を原則としている。
- c もうす～：mousu を原則としている。
- d もうせ～：mou·syoi として統一している。
- e もうそ～：mou·so として統一している。

[75]改一32オ [76]改一13ウ [77]改一13ウ [78]改一33オ [79]改五40オ

니루시 **야**루사례마쓰루  
**사**레  
**마**쓰  
**루**

솔오 **야**루마쓰루  
**마**쓰  
**루**

니루은 **야**루와  
**와**

솔오라코 **야**루세  
**세**

사울가 **야**루소우  
**소**우  
**가**

上記の a, d, e は日本語本文「申」にあたるハングル音注 mou がすべて真横配置されているのに対して、b, c は「申」にあたるハングル音注 mousi, mousu が原則的に真横配置されており、「申」の音注配置には規則性が見られる。ただし、例外として、まず b の場合は「申」の初出例1例(一1ウ(例[80]))だけが mou·si となっており、c の場合は mou·suŋ·ka2例(五18オ, 19オ(例[81])), mou·suŋ·ki·tyoi1例(七24オ(例[82])), mou·sum·pyoi·kul1例(十上18ウ(例[83]))と mou·su·ni2例(五36オ(例[84]), 六23オ)がある。これらの例のうち4例は「申」に後続する鼻濁音·ŋ·k·, ·m·p·の例で、·ŋ·, ·m· を·k·, ·p·から切り離して「申」の音注として·ŋ·, ·m· まで取りいれるには無理があったためではないかと思われる。なお、「候」の草仮名にも so·ro のように二文字のハングル音注が規範的に「真横表記」されている(例[85])\*<sup>5</sup>。以下では、改修本の例をあげる。

[80]一1ウ [81]五19オ [82]七24オ [83]十上18ウ [84]五36オ [85]十上18ウ

니루기론 **야**루시마쓰루와  
**야**루기론

니루니 **야**루승가  
**야**루승가

숨논일이로 **야**루승기테  
**야**루승기테

중 **야**루승배구  
**야**루승배구

슬오매 **야**루승내  
**야**루승내

중 **야**루승호  
**야**루승호

以上のように、長音の音注配置は語形のゆれや仮名遣いの誤りがあっても、日本語本文の仮名文字や漢字に対してハングル音注は、一対一相對の「真横表記」を規範としていることがわかる。

### 3.2. 拗長音の音注配置

拗長音の場合、拗音の部分は撥音及び促音、舌内入声音(t 入声)の例と同様に日本語本文の仮名文字に対するハングル音注の配置が二対一相對の「ずらし表記」を原則としている。それに対して、拗長音の長音の部分は前節の長音の例と同様に仮名文字に対するハングル音注の配置が一対一相對の「真横表記」を原則としている。

② 쇼 우 견      쇼 우 관      묘 우 니 지  
し ゆ う け・ん      し や う くわ・ん      み や う に ち  
(祝言, 改六10オ)      (正官, 改一22ウ)      (明日, 改一23ウ)

[86]

祝 **し** **ゆ** **う** けん  
言

[87]

正 **し** **や** **う** かん  
官

[88]

明 **み** **や** **う** に ち  
日

一方、拗長音「～ゅう」の仮名・i・u はハングル音注において・yu・' u として用いられる場合と、・i・' u として用いられる場合に分けられる。以下では、改修本に見られる仮名・i・u の例と音注・yu・' u と・i・' u の全ての例を取りあげてみる。

＊仮名・i・u が音注・yu・' u になる例

「ちう」(中)40例(異なり語数19例)、「ちうしん」(註進)9例、  
 「にうかん」(入館)6例、「せんちう」(船主\*)3例、「こしきう」(腰灸)1例、  
 「せんきう」(前規)1例、「ちんちう」(珍重)1例

＊仮名・i・u が音注・i・' u になる例

「しう」(十)41例(異なり語数23例)、「とうりう」(逗留)9例、  
 「しうしつ」(終日)3例、「あきうと」(商人)1例、「きうに」(急に)1例、  
 「せうりう」(笑留)1例、「ひうか」(日向)1例、  
 シク活用形容詞「～しう」49例(異なり語数18例)、助動詞「らし」1例

以上のように、拗長音「～ゅう」の仮名・i・u のハングル音注が・yu・' u と、・i・' u として語別による統一性が見られるが、それぞれの音注が何を意味するかについて、森田(1973, p. 241)は「まだ i 音を重く発音する傾向のあったことを示すものであろう」と述べ、発音の差と捉えている\*7。しかし、拗長音の仮名を表すのにハングル音注において・yu・' u, ・i・' u として語別による統一性が見られるのは、日本語史の反映というより『捷解新語』が日本語学習書という性格によるもので、同じ語に同じ表記を用いることによって日本語を把握しやすくするためであったことが考えられる。

#### 4. 長音「～う」「～お」の表記

本節では、日本語本文における長音「～う」と「～お」の表記の実態とともに、日本語本文と音注表記との対応について調査・考察を行う。



## 4.1. 長音「～う」表記と「～お」表記の実態

日本語本文における長音「～う」と「～お」の表記は、刊本、または語彙によって「～う」と「～お」の両表記が用いられる場合(大方、大坂、大酒等)と、長音「～お」表記のみ用いられる場合(おおして(応じて, 三23オ), おおらい(往来, 三21オ)), 長音「～う」表記のみ用いられる場合(とうか(十日, 三32オ, 五13オ))等がある(＜表1＞参照)。

＜表1＞長音「～う」「～お」の表記

用例	長音表記	原刊本	改修本	重刊本
大方	～う	2	1	0
	～お	1	2	1
大坂	～う	3	0	0
	～お	0	3	2
大酒	～う	1	1	0
	～お	2	1	1
負す	～う	1	0	0
	～お	0	1	0
仰す	～う	10	9	0
	～お	0	26	24
仰せらる	～う	0	6	0
	～お	(おしらる)	66	38
大様	～う	0	0	1
	～お	0	1	0
饗応	～う	0	1	0
	～お	0	1	1
	オウ	0	1	0
遠し	とうい	2	1	1
	とうウ	1		
	～お	0	1	1
通り*8	たうり	13	23	13
	とうり	9	4	2
	とおり	0	1	2
	とをり	0	0	3

大竹	～う	1	0	0
大船	～う	1	0	0
近江	～う	1	1	1
十日	～う	2	2	2
おおくらましよう	～お	0	1	1
応ず	～お	0	1	0
往来	～お	0	1	0
多し	おおウ	2	2	1
	おおく	0	1	0
	おおけれ	1	0	0
残り多し	～おおい	2	0	0
	～おおう	2	6	3
	～おおさ	1	1	1
大隅	～お	1	1	1

(表内の「饗応」の「オウ」、「遠し」「多し」「残り多し」の「ウ」は、仮名表記及び音注が表記されていないことを示す)

<表1>のように、原刊本における長音表記「～う」「～お」は一語でも不統一のものがあるが、改修されることによって「～う」から「～お」へと統一される傾向がある。特に、「仰す、仰せらる」の例は原刊本において「仰す」(10例；巻五1例、巻七1例、巻十8例)のすべての例が長音「～う」として表されたのに対して、改修本において「仰す」「仰せらる」の例は巻二(「仰せらる」6例)、巻十(「仰す」9例)では長音「～う」が用いられ、それ以外の巻では長音「～お」が用いられる<sup>\*9</sup>。さらに、重刊本においては「仰す、仰せらる」の例は長音「～お」として統一した表記が用いられる。

なお、<表1>の例の他に、原刊本には-o と-u の誤りの例も見られるが、改修本や重刊本では修正される例が多く、別に考えたい。

・-u であるべきところに-o が用いられる場合

かなしお(う)(悲し、二5オ)

しろ(る)し(印、八3ウ)

すこ(く)なし(少なし、一13ウ)

ふろ(る)う(古し、二11ウ)

みくろ(る)しイ(見苦し、六24オ)

・-oであるべきところに-uが用いられる例

そむ(も)やそも(抑や抑、四15ウ)

ひとしう(お)(一入、九16ウ, 十7オ, 22オ, 35オ)

cf)ひとしゆ(お)(一入、六5ウ)

→改修本、重刊本の「一入」例

ひとしう(お)(改十上13ウ, 中24オ)

ひとシオ(改九23ウ)

ひとしお(改六8オ, 重六6ウ)

以上のように、原刊本における長音表記「～う」「～お」が混乱していることは『捷解新語』の編者、康遇聖の母語である朝鮮語による影響の可能性が考えられる。仮名「う」「お」は朝鮮語において音韻論的に' u, ' oとして弁別することができるが、長音「おう」「おお」のような母音連続の場合、長音拍の概念を持たない朝鮮語母語の話者にとって長音「～う」「～お」は区別しにくいものだったようである。

しかし、原刊本において長音表記「～う」「～お」が混乱してはいるものの、長音表記が施されるべき個所に原則的に「～う」「～お」が用いられていることは、日本語において守られている拍を示すことを最も優先させたためではないかと思う。つまり、朝鮮語母語話者としては、拍(母音の時間の長さ)の把握が第一に優先され、' uか' oかという母音の音色は二次的に捉えられたようである。『捷解新語』において長音「～う」「～お」表記にハングル音注' u, ' oが統一的に用いられることによって、実際の発音とはほど遠くなる場合もある。即ち、長音「～う」にハングル音注' uが規範的に用いられると、ウ段音節に続く「くう」「ふう」の「～う」は問題なく発音されるが、オ段音節に続く「おう」「こう」の「～う」は実際

の長音の発音とはかけ離れることになる。このように、実際の長音の発音とはかけ離れる場合でも、長音「～う」にハングル音注' uを規範的に用いることによって、「おう」と「おお」の二音節目の長音「～う」と「～お」が紛らわしくなることを避けるとともに、日本語において意味弁別上重要な長音の拍を示したのであろう。

一方、長音「～う」が「～お」へと改訂される中で、長音表記の誤り例として考えられる「大様」(おおやう(改修四4ウ)→おうやう(重刊五6オ))の例や原刊本から重刊本にかけて改訂されないまま長音「～う」として表記される「とうか」(十日)、「たうり、とうり」(通り)等の例が見られる。これは、同音連続の長音「～う」「～お」の場合、朝鮮語母語話者は長音が存在することは把握できても、長音「～う」であるか「～お」であるかを正確に捉えるのは難しかったようである。

長音の表記に関する仮名遣いは、日本人による仮名表記でも江戸時代末期まで一般的にはっきりした基準がなかったといわれているが、以上のように、『捷解新語』における長音の表記法も必ずしも統一的であるとはいえない。

なお、キリシタン資料の『日葡辞書』に見られるオ段長音の表記の場合も、必ずしも規則的ではなかったようである。例えば、キリシタン資料の『日葡辞書』では、開長音は ろとして、合長音は ôとして書き分け、「往来」には開音 ろが、「大～」「負せ」「仰す」「仰せらる」「応ず」には合音 ôが用いられ、「多い」(Vouoi.)「遠い」(Touoi.)「通り」(Touori.)には uo が規範的に用いられている例も見られる。しかし、その一方、「殃」「王」の例のように開音 ろと合音 ôを混同する例も見られる。

Vôsai(殃災)

Võqua(殃禍)

Vôjen(王膳)

Võzon(王孫)

以上のキリシタン資料における『日葡辞書』の長音の表記のように、『捷解新語』における長音の表記も必ずしも統一的ではない<sup>\*10</sup>。

但し、『捷解新語』の場合、改訂とともに全体的に長音表記の方向性が見られることから、出来る限り当時の日本人による日本語表記の実態を忠実に反映しようとしたことが考えられる。これは、朝鮮語母語話者にとって正確に捉えるのが難しか

った長音を、間違いがない範囲内で効果的に学習させるための工夫の結果であると思う。

#### 4.2. 日本語本文と音注表記との対応

4.1節で明らかになったように、『捷解新語』の日本語本文の長音表記は歴史的仮名遣いとして正しい仮名遣いを守ってはおらず、それどころか一つの語は一つの表記で統一するという『捷解新語』内部での表記の一貫性ということも実現されていない。改修を経るにしたがって次第に語によって統一される傾向を示すが最後まで表記の統一は完成されていない。

一方、3節の音注配置の記述で述べたように、

日本語本文で「～う」と表記される時は音注でも「～' u」と表記され、

日本語本文で「～お」と表記される時は音注でも「～' o」と表記される。

という日本語本文と音注との表記上の対応は、先に「機械的に」という言葉で評したように原刊本の段階から極めて厳密に守られている。日本語表記ハングル表記間の「統一」と、語の表記における「不統一」という、相反する傾向を見せるこのような『捷解新語』の実態は、どのようにして生まれたものと解釈すべきであろうか。

まず言えることは、『捷解新語』原刊本の日本語本文が語によって長音表記を統一していないことは明らかであろうから、日本語の正書法によって長音表記を決定しようという意図はなかったと考えられることである。そして、この点は今まで見てきた『捷解新語』日本語本文の性質に沿う方針であったと言える。

ということは、基本的にはこれまでの日本語本文と音注との関係で見てきたように、まず朝鮮語母語話者（もともとは原作成者、康遇聖）により把握された日本語があり、それをハングルで表音的に表記し（ハングル音注）、さらにそれに対応して日本語本文がこれまた表音的に表記されていると見てよいであろう。長音についてもこの基本は変わらなかったはずである。

しかし、朝鮮語母語話者にとって日本語の長音の正確な把握には相当の困難があ

ったことが予測される。それは現代において日本語を学習しようとする朝鮮語母語話者にとっても日本語の長音の把握なり習得なりがなかなか難しいという経験的事実によって充分予測できることなのである。

上の現代の「経験的事実」としての長音把握における困難点を挙げてみよう。

まず、母語である朝鮮語の側の問題点として、

- ①朝鮮語に長音と短音との明確な音韻論的対立がない。
- ②したがって、ハングルで長音をそれとして表記する手段を持たない（母音音節の連続として表記するしかなく、この点は日本語の仮名表記も同様である）。

そして、学習対象である日本語の側の問題として、

- ③音韻として長音は成立しているが、実際の発話では、しばしば明確な一拍分の長さを持たず発音されてしまう（例えば、ぞんざいな発話における「遠い」の発音など）。
- ④一拍分きちんと発音されたとしても、実際の発話ではその音価がしばしば曖昧である（例えば「奥羽」や「覆う」の発音に見られるように、オ段の長音にしても「o:」「o' o」「ou」と種々に発音される）<sup>\*)</sup>。

上に挙げたような、長音を把握するうえでの困難は、『捷解新語』当時の朝鮮人日本語学習者にとっても共通した困難であったと考えてよいであろう。

厳密には当時の日本語における長音の発音の実態を細かく究明してから議論すべきではあろうが、キリシタン資料が示すように、少なくともウ段・オ段長音は音韻として確立していたと思われるし、所詮過去の時代の自然な発話における発音の変異を正確に捉えることは難しいので、ここでは上記のような推測に立って考察を進めることとする。

『捷解新語』編者は曖昧でゆれのある日本語長音拍を耳で捉え、捉え得た限りで

(というのは、次節に見るように、長音を捉えられていないと思われる長音無表記の例が存するからである)、ハングル表記で(長音独自のハングル文字がないために、やむをえず)「' u」または「' o」で表記し、日本語本文では、日本語での正書法や語の表記としての統一にこだわらず、

「' u」 → ～う

「' o」 → ～お

という対応にしたがって機械的に表記したものと思われる。このように考えると、朝鮮人のための日本語学習書である『捷解新語』において、長音をめぐってなぜ当該の状況を呈しているかが最も良く説明できるように思われる。この解釈が全て当たっているかどうかは確定できないかもしれないが、『捷解新語』が見せる奇妙な「統一」と「不統一」は、当時朝鮮語を母語とする者が日本語を学習しようとする際に、長音が学習困難なものであったことを物語るものであることは確かなことであろう。

## 5. 長音の無表記

長音表記の中で、形容詞連用形の音便形「～う」は表記されない傾向がある。例えば、「遠し」「多し」「残り多し」等のク活用形容詞連用形の音便形「～う」の全ての例と「嬉し」「珍し」等のシク活用形容詞連用形の音便形「～う」が仮名表記でもハングル音注でも表記されない例が多数見られる。

### 5.1. ク活用形容詞連用形の音便形に生じる長音無表記

まず、ク活用形容詞連用形の音便形「～う」が表記されない「遠し」「多し」「残り多し」の例を中心にしてみる。

＊「遠し」のウ音便の例

＊「とうウ」のカタカナ「ウ」は、本来あるべきはずの連用形ウ音便活用語尾が表記されていないことを示す。以下、例文中のカタカナ表記は表記されないことを示す。

＊＊釈文は、基本的に「捷解新語釈文」(1973)による、以下同様。

さきほとわた加いにとうウ\*(to·' u)いと里まるしたほとに(原三10オ)

先程は互に遠ウ居取りまるした程に\*\*

さきほとわた加いにとうくにいましたほとに(改三13オ)

さきほとわ。たかいに。とうくに。いました。ほとに(重三13オ)

＊「多し」のウ音便の例

しきにみて申こと加おおけれとも(原二12オ)

直に見て申す事が多けれども

しきに御めに加加里まして申あけますること加おおう(' o·' o)御されとも

直に御目に懸かりまして申し上げます事が多ウ御座れども (改二17ウ)

対応本文ナシ(重)

こと加おおう(' o·' o)て(原二16ウ)

事が多ウて

奈に加とことおおう(' o·' o)御さつて(改二24オ)

何角と事多ウ御座つて

なにかと。ことおおう(' o·' o)。御さつて(重二24オ)

何角と事多ウ御座つて

里よくわいのことはおおう(' o·' o)しまるした加とおもいまるする

慮外の言葉を多ウ為まるしたかと思ひまるする (原三19ウ)

対応本文ナシ(改)



対応本文ナシ(重)

\*「残り多し」のウ音便の例

ことのほ加のこ里おおう(no·ko·ri·' o·' o)御さる(原二2オ)

殊の外残り多ウ御座る

御のこ里おおう(no·ko·ri·' o·' o)そんします(改二2ウ)

御残り多ウ存じます

御。のこり。おおう(no·ko·ri·' o·' o)そんし。ます(重二8ウ)

御残り多ウ存じます

対応本文ナシ(原)

まことに御のこ里おおう(no·ko·ri·' o·' o)そんします(改二6ウ)

誠に御残り多ウ存じます

まことに。御。のこりおおう(no·ko·ri·' o·' o)。そんします(重二12オ)

誠に御残り多ウ存じます

あま里のこ里おおいほとに(原二6オ)

餘り残り多い程に

あま里のこ里おおう(no·ko·ri·' o·' o)御さ里ますゆゑ(改二8ウ)

餘り残り多ウ御座ります故

あまり。のこり。おおう(no·ko·ri·' o·' o)御さり。ます。ゆゑ(重二14オ)

餘り残り多ウ御座ります故

対応本文ナシ(原)

い加う御のこ里おおう(no·ko·ri·' o·' o)も御さ里はらもちます(改二18オ)

いかう御残り多ウも御座り腹も立ちます

対応本文ナシ(重)

のこ里おおウ (no·ko·ri·' o·' o) 御さたに (原三1オ)

残り多ウ御座つたに

のこ里おおウ (no·ko·ri·' o·' o) 御さつたに (改三1ウ)

残り多ウ御座つたに

対応本文ナシ(重)

対応本文ナシ(原)

い加うのこ里おおウ (no·ko·ri·' o·' o) 御さ里ませうほとに (改七17オ)

いかう残り多ウ御座りませう程に

対応本文ナシ(重)

以上のように、ク活用形容詞連用形の音便形「～う」が表記されない例を見ると、「遠し」は原刊本に現れる1例に「～う」が表記されていない。また、「多し」「残り多し」のク活用形容詞連用形の音便形「～う」の全ての例が表記されない。

「多し」：原刊本2例、改修本2例、重刊本1例

「残り多し」：原刊本2例、改修本6例、重刊本3例

このように、ク活用形容詞連用形の音便形「う」が改修本以後も改訂されないまま仮名表記でもハングル音注でも用いられない場合がある。特に、原刊本とともに、改修本、重刊本においてもウ音便「う」の全ての例が表記されていないのは、「とうウ」「(残り)おおウ」のように同音連続の長音が二拍、三拍になる場合、朝鮮語母語話者にとって長音を捉えることが難しかったためであると考えられる。つまり、「とうウ」「(残り)おおウ」のように長音がさらに一拍分引きのばされる形になる場合、朝鮮語を母語とする人にとってそこに長音が存在することは把握できても、同音連続のため拍数の違いを正確に捉えるのが難しかったようである。

## 5.2. シク活用形容詞連用形の音便形に生じる長音無表記

次に、シク活用形容詞連用形の音便形「う」が表記されない例を見てみる。シク活用形容詞連用形の音便形「～しう」は同音連続ではないが、「嬉し」「珍し」等の音便形「う」が表記されない例が多数みられる。以下では、原刊本の例を取りあげる。以下の〈表2〉のように、同じ語にシク活用形容詞連用形の音便形「う」が表記されない例として「嬉し、夥し、苦し、忙し、恥ずかし、久し、見苦し、珍し」等の例が見られる。そのうち「嬉し、夥し、久し、珍し」の例は音便形「う」が表記される場合もある。

〈表2〉シク活用形容詞連用形の音便形「う」の表記

用例	「う」が表記されない例	「う」が表記される例
嬉し	5	1
夥し	1	1
苦し	2	
忙し	1	
恥ずかし	1	
久し	1	5
見苦し	1	
珍し	1	2

また、以下の例はすべて音便形「う」が表記される。

「悪し」(2例)、「幾久し」(1例)、「鬱陶し」(1例)、  
「可笑し」(1例)、「詳し」(2例)、「御難し」(1例)

一方、改修本においては、シク活用形容詞連用形の音便形「みくるしう」(見苦し, 改五42ウ)1例のみ音便形「う」が表記されず、その他の例はすべてが音便形「う」が表記され、改訂による統一性がみられる。

以上のように、原刊本においてシク活用形容詞連用形の音便形「う」が表記されない例は、前節の同音連続の長音「う」が表記されないこととは別の理由があるよ

うに思われる。

森田武(1973, pp. 248-249)では、原刊本のシク活用形容詞「くるし」(四20ウ)、「うれし」(二3ウ)、「ひさし」(三20ウ)、「ことことし」(四12ウ, 八27オ)等の例を取りあげ、「ーし」形は「ーしゅ」形が変化したものであると指摘している。また、シユのシへの変化傾向は、「片言」にも見えるとし、「種々」を「しじう」、「福祿寿」を「ほくろくじ」、「宿老」を「しくらう、しくろ」等の例と「史記抄」、「毛詩抄」の例をあげたうえ、『捷解新語』原刊本に「首尾」を「しび」si-pi(八32オ, 十17オ)とする例と共通しているとしている。

原刊本の「しび」si-piの例は、改修本では「しび」si-pi(十中13ウ)と「しゅび」syu-pi(八47ウ)が用いられ、重刊本では2例ともに「しゅび」syu-pi(八26オ, 十中12ウ)として用いられており、「し」は「しゅ」形の変化したものであることが見受けられる。

また、原刊本の例に、「ことことしゅう」(事々し)3例(四12ウ, 八27オ, 九21オ)すべてが「しゅ」として用いられており、「らし」(助動詞)の例には「らしう」1例(一19オ)、「らしゅう」1例(七21ウ)が用いられている。このように、原刊本当時、「しう」と「しゅう」が音声的に類似していたことが考えられる。だとすると、シク活用形容詞連用形の音便形として「しう」だけではなく、「しゅう」を用いることも可能だったはずであるが、シク活用形容詞連用形の音便形を「し(う)」の形として統一させることになったのは、日本語の活用体系に矛盾しない形を用いることによって日本語学習に役立てようとしたのではないかと思う。

### 5.3. その他の長音無表記

前述のク活用・シク活用形容詞連用形の音便形に生じる長音無表記の他に、同音連続の長音が表記されない例は多数見られる。以下では、原刊本に現れる長音の無表記の例を中心に上げ、改修本以後も長音の無表記が見られる例をまとめてみる。

\*-i-i>-i

「愛らし」あいらしイ(九六オ)1/1\*

(\*1例のうち1例の長音表記が表記されていないことを示す)

「(御)難し」むつかしイ(三九ウ, 七1ウ)2/2→むつかしイ(改三12ウ)1/2(改四34オ)

「事淋し」ことさひしイ(九11ウ)1/1

「恥ずかし」はつかしイ(九7ウ)1/1

「見苦し」みくろしイ(六24オ)1/1

「珍し」めつらしイ(三3オ, 六10オ, 八27オ, 28オ) 4/4

「第一船」たいイツせん ta-' i-syon(十28オ)1/2

\*-e-i>-e

「芸」けイ(六7ウ)1/1

「まるする」(助動詞)まるせイ(八32オ)1/1

\*-o-o>-o(上記の「遠し」「多し」「残り多し」の例は重複のため省略)

「鬱陶し」うつとウしう(一3オ)1/1

\*-o-u>-o

「相」さウ(八16ウ, 御むつかさウ(相)～に on-mu-cu-ka-sa-ni)1/3

「粗相」原刊本用例ナシ→そそウ(改二12ウ)1/1

「草々」原刊本用例ナシ→さウさウ(改九9ウ)1/10

「然々」そうそウ(七19ウ)1/1

「多人数」原刊本「たにんちう」(多人中)4/4

→たにんすウ(改六5オ, 七5ウ, 八19オ, 26オ)4/4

「未収」原刊本用例ナシ→みしゆ(改十下1ウ)1/1

「もう」(副詞)\*<sup>12</sup>(一19ウ, 二6ウ)2/2→改修本(一29オ, 二9ウ)では「もう」

さけおはもうおかしられ(原一19ウ)

酒をばもう置かしられ(基本的に「捷解新語釈文(1973)による」)

たひすこいまるしたほにももうおかしられ(原二6ウ)

食び過ごいまるした程に、もう置かしられ

「よう」(助動詞)(四14オ, 五30ウ)2/2

おのおののめにもみようするに(原四14オ)

各々の目にも見ようずるに

→ cf) おのおののにもみゑませうところに(改四19ウ)

しんすにたいめんしてまたもかたてみようほとに(原五30ウ)

信使に対面して又も語ってみよう程に

→ cf) しんすにたいめんしてまたも申たててみませうにより(改五43ウ)

\*・u・u>・u

「強し」きつウ(四12ウ, 五25ウ)2/2

「心安し」ころやすウ(一15オ, 五20ウ, 六14ウ, 20オ, 八16ウ)5/5

「低し」ひくウ(二9ウ)1/1→改修本用例ナシ

「安し」やすウ(六20ウ)1/1→改修本用例ナシ

「悪し」わるウ(二12ウ, 四10オ, 26ウ)3/4(わるう, 一11ウ)

\* 長音ではないが、長音として表記される例

「由」ようし(六19オ)1/14 よし(七1例, 十12例)

「好し」ようし(六8ウ)1/3 よし(二3ウ, 三26ウ)

以上の例からもわかるように、同音連続の例に長音が表記されない例が多数見られる。また、多くの例に語別による表記の統一性が見られており、特に、「珍し」「安し」等の長音「い」は全ての例が表記されていない。一方、「第一船」の例は、「たいいつせん」ta·' i·' it·syoin(四7ウ)としても用いられているが、「たいイツせん」ta·' i·syon(十28オ)のように、母音連続-i·i の-i が表記されず、さらに、促音「つ」も表記されていない例もみられる。このように、朝鮮語母語話者にとって同音連続の長音の拍数の違いを正確に捉えるのは難しかったことが考えられる。

## 6. 『捷解新語』における長音把握の特性

『捷解新語』における長音の把握は、長音と短音の音韻論的対立を持たない母語である朝鮮語の干渉を受けていることが考えられる。即ち、『捷解新語』では、日本人にとっては長音として捉えられ発音されているはずのものをしばしば捉えそこなっている(長音が表記されていない)ことから明らかである。

このような『捷解新語』における長音の状態を直ちに日本語の実態を忠実に反映しているものと見るのは、朝鮮人による日本語学習書である『捷解新語』の特性を無視した見方であり、慎むべきである。

例えば、林(1997)では、原刊本の「おのおのの御ために御むつかしうことに (ngko-mu-cu-ka-si-' ung-ko-to-ni)御さ候わ」(原十27オ)の例を取りあげ、「原刊本「むつかしう」の形が連体形に相当するものであり、シク活用形容詞の連体形において、イ音便形の-sii が-siu の形を取る場合のあったことを示している」としている。その根拠として、「この例を載せる第十巻は書簡文の形式を取るものであるが、そのハングル訳注の欄には「御六箇敷事御座候者」の漢字表記による訳文が当てられている」ことと、改修本において「おのおのの御ために御むつかしき (' o-mu-cu-kka-si-ki)御さ候わ」(改十下7ウ)のように改められていることを挙げている。また、引き続き以下のように述べている。

\*本文献におけるシク活用形容詞ウ音便形には、語形の安定度にいまだ欠けるところのあったことが窺われる(p.22)。

\*シク活用形容詞の連体形において、イ音便形の-sii が-siu の形を取る場合のあったことを示している(p.25)。

\*連体形においてこのような-sii>-siu の交替が見られることは、一方の連用形にも-siu>-sii の交替が起こり得たことを暗示しているように思われる

(p.25)。

\*形容詞の連用形に上記のようなゆれが生じているのは、そのウ音便化によって活用語尾が拗長音の形へ向かうことを阻止するために、不安定な-iu の母

音連接の形を回避して他の母音結合の形を模索する力が働いていたことを示すものと解すべきではあるまいか(p. 25)。

上のいずれもが、(1)『捷解新語』の資料としての特性を無視していること、(2)形容詞の連用形と連体形がそのような音交替ないし音変化を起こすのは文法の側からの抵抗によって考えられないこと、の2点から否定さるべき解釈である。

以上のことから、長音に関しては、『捷解新語』は直接日本語史資料とすべきではない。そこにおける長音の姿は、朝鮮語の干渉によって歪められているものと見るべきである。ただし、『捷解新語』における長音把握がこのように混乱しているということは、規範性・統一性を極力心がけている『捷解新語』においてなお、日本語の長音が捉えにくいものであったということであり、間接的に、当時の日本語長音が現代の日本語長音と同じように発音に曖昧な面があったことをうかがわせるものである。

キリシタン資料はポルトガル語やラテン語を通して見た日本語の姿であり、『捷解新語』などの朝鮮資料は朝鮮語を通して見た日本語の姿である。それぞれの利点と限界を踏まえた上で日本語史資料として利用すべきである。本研究はまさにそのために『捷解新語』の資料性を見極めようとした研究に他ならない。

## 7. 本章のまとめ

本章は、『捷解新語』における長音の仮名表記及びハングル音注、音注配置について、日本語学習書としての規範性・統一性の解明を中心に考察を行ったものである。その結果、以下のようなことが指摘できる。

- 1) 長音の仮名表記「～う」と「～お」にハングル音注「～우」(‘ u)と「～오」(‘ o)が機械的に対応している。
- 2) 長音の仮名表記「～う」と「～お」の仮名遣いの誤りの例が多数見られる。
- 3) 長音部分は仮名表記でもハングル音注でも同様に表記されない傾向がある。



4)特に、「多う」「残り多う」の長音は、改修本、重刊本でも改訂されず表記されていない。

このように、長音の誤りの例や長音無表記の例が見られるのは、朝鮮語母語話者にとって長音が存在することが把握できても拍数の違いを捉えるのが難しかったためであると考えられる。なお、ハングル音注配置の原理は日本語本文の仮名文字とハングル音注とが一对一相對の形式を規範としていることが指摘できる。特に、長音の場合は語形のゆれや仮名遣いの誤りがあっても、仮名文字に対してハングル音注が一对一相對を固く守っているのが一般的である。これは、『捷解新語』が朝鮮人の手になる朝鮮人のための日本語学習書という性格から、日本語の長音拍の実態把握に苦心しながらも、朝鮮語の音韻体系及びハングルの表記原理になじんだ朝鮮人学習者に日本語の正しい発音を学習させようと可能な限りの規範性・統一性に基づく仮名表記及びハングル音注、音注配置を用いた結果であると解釈される。

## 注

- \*1 厳密に言えば、《日本語本文における長音表記「～う」「～お」》であるが、簡略に《長音「～う」「～お」》と記す。以下同様。
- \*2 趙來喆(2001, 2002a)参照。
- \*3 以下、特記しない限り、改修本の用例を示す。
- \*4 オ段長音の「開」「合」の区別について、林(1996, p. 190)では「<四つ仮名>の区別とともに概略16世紀末～17世紀初まで保たれたが、17世紀後半にはほぼ合流が終了していると推定される」としている。本章で取り扱う『捷解新語』における仮名表記は必ずしも統一的ではないが、全体的に方向性が見られることから、そのまま当時の仮名表記の実態を反映しているものとしては考えられる。また、ハングル音注においても、このような日本語史の事実が十分に反映されたものと思われる。
- \*5 日本語本文の「候」の草仮名にも so-ro のように二文字のハングル音注が規範

的に「真横表記」されている。日本語本文の「候」は、原刊本では改修本と同様に so-ro が、重刊本では so' o-ro がそれぞれ規範的に「真横配置」になっている。なお、「候」の音注が原刊本、改修本では so-ro であったのに対して、重刊本では「候」の変化とは逆方向の so' o-ro として一致させているのは、巻十の書簡文に古めかしさを表すためであろう（「候」は巻十の書簡文にしか現れない）。

- \*6 「船主」の日本語本文の仮名は「せんしゆ」（三6オ）の場合と「せんちう」（一22オ（2例）、三36ウ）の場合があり、それぞれハングル音注において syoin-syu と syoin-cyu' u が用いられる。但し、この場合でも仮名「しゆ」の場合には「ずらし音注」syu が用いられ、仮名「ちう」の場合には「真横音注」cyu' u が用いられ、音注配置において規範性が見られる。また、「船主」の例の他に「～主」の例として「亭主」があるが、そのすべての例（一48ウ、三22ウ、八10オ、33ウ、九10オ（2例））に「ていしゆ」tyoi' i-syu の「ずらし表記」が用いられており、「船主」の「主」が「ちう」cyu' u として用いられるのは朝鮮漢字音 cu の影響のように思われる。
- \*7 韓国語において-yu' u と-i' u の音価は異なるものであることは認められるが、音声的に両者が全く異なるものであったということには疑問が残る。例えば、「にうかん」（入館）の場合は、原刊本では ni' u-koan 4例、nyu' u-koan 3例が見られるが、改修本以後はすべての例が nyu' u-koan として用いられる。さらに、「ちうしん」（註進9例）場合は、原刊本ではすべての例がハングル音注 ci' u-sin であったのに対して、改修本以後はすべての例が cyu' u-sin として用いられている。このように、原刊本において音注-yu' u と-i' u との混同が見られるということは両者が音声的に類似しているからであろう。

\*8

仮名	原刊本	改修本	重刊本
とをり	0	0	3
とおり	0	1	2
とうり	9	4	2
たうり	13	23	13

- ・原刊本：「たうり」13例のうち漢字による対訳「道理」10例。10例すべてが「通り」の意味を表す。残りの3例(五28オ, 七15オ, 19オ)は朝鮮語対訳で「通り」の意味。
- ・改修本：「たうり」23例のうち漢字による対訳「道理」10例。10例すべてが「通り」の意味を表す。残りの13例(一28オ, 36オ, 二1ウ, 四8オ, 五20オ, 28オ, 41オ, 六16オ, 19ウ, 32オ, 七31オ, 八20オ, 26オ)は朝鮮語対訳で「通り」の意味。
- ・重刊本：「たうり」13例のうち漢字による対訳「道理」5例。5例すべてが「通り」の意味を表す。残りの8例(一29オ, 二7ウ, 四8オ, 六14ウ, 17ウ, 28オ, 八14ウ, 19オ)は朝鮮語対訳で「通り」の意味。
- \*9 安田(1991)「改修捷解新語 解題」で、「仰せらる」等の「仰せ～」に対して、「おうせ～」は巻二と巻十に限定(例外は「おおせ～」二10オのみ)されているとの指摘がある。また、原刊本におけるすべての巻において、日本語本文では「おうせ～」が、ハングル音注では o' u-syo-i が用いられる。
- \*10 森田(1980)では、特に注意を払ったはずの見出し語の中にさえ、開長音と合長音の混同する例が見られることを指摘している。

Mattô(全 <sup>まつた</sup> う)	Côguio(江 <sup>カウギヨ</sup> 魚)	Meôjin(明 <sup>ミヤウジン</sup> 神)	Vôsai(殃 <sup>フウサイ</sup> 災)
Miôtan(妙 <sup>メウタン</sup> 丹)	Guenxô(減 <sup>ゲンセウ</sup> 少)	Giômocu(条 <sup>テウモク</sup> 目)	

このように ô→ô, ô→ô の双方があるが、混同例は特に補遺に多い。これは、刊行を急ぎ検討補正を加える余裕がなかったためと想像されるけれども、また一面特に注意を払わなければ混同しやすかったことを物語るものである。(p. 851)

- \*11 福居(1998)では、オ列長音のローマ字書き取りテストの結果、オ列長音相互間の差異について「オ列長音には、かな書きでウを送るものとオを送るものがある。検査語の中では「大阪／おおさか」と「箕面／みのお」がオを送り、他はすべてウを送るのが規範的とされている。ローマ字での表記法は“ô, oo, oh, ou”などがかんがえられる」と述べている。

- \*12 原刊本の「もう」は、『日葡辞書』において「MO.」として見られるが、土井(1980)の『邦訳日葡辞書』の訳注によると「Oが大文字で印刷されているので開音符号がついていないが、Mōと見るべきもの」との記述があり、正しくは「もう」であったようである。

## 参考文献

- 河野六郎(1994)「ハングルとその起源」『文字論』三省堂
- 趙 燦熙(2001)『朝鮮資料による日本語音声・音韻の研究』제이앤씨 ソウル
- 趙 來喆(2000)「『捷解新語』における並書表記について——舌内入声音、促音の書記例を除いた並書を中心に——」筑波大学 文芸・言語研究科 日本語学研究室『筑波日本語研究』第五号
- 趙 來喆(2001)「『捷解新語』における対訳・音注の配置について」筑波大学 文芸・言語研究科 日本語学研究室『筑波日本語研究』第六号
- 趙 來喆(2002a)「『捷解新語』における音注配置の原理——日本語学習としての規範性の解明を中心に——」『日本語と日本文学』第35号 筑波大学国語国文学会
- 辻 星児(1988)「戊辰版『改修捷解新語』の朝鮮語について—その表記・音韻を中心に—」『岡山大学文学部紀要』10、『朝鮮語史における『捷解新語』』岡山大学文学部1997所収
- 辻 星児(1997a)「『捷解新語』に見られる文法意識—対訳朝鮮語の配置を通して—」『日本語と朝鮮語(下)』国立国語研究所
- 辻 星児(1997b)『朝鮮語史における『捷解新語』』岡山大学文学部
- 濱田 敦(1970)「朝鮮資料」『朝鮮資料による日本語研究』岩波書店
- 林 史典(1996)「古代の音韻・音韻史」「文字・表記」『日本語要説』ひつじ書房
- 林 義雄(1997)「原刊本『捷解新語』におけるシク活用形容詞ウ音便形のゆれについて」専修国文61号
- 福居誠二(1998)「ローマ字による長音表記 特にオ列長音に注目して」『聖和大学

論集』第26号

森田 武(1973)「捷解新語解題」『三本対照 捷解新語 釋文・索引・解題篇』

京都大学文学部国語国文学研究室編

森田 武(1980)『邦訳日葡辞書』補説 岩波書店

安田 章(1980)「対訳の問題」『朝鮮資料と中世国語』笠間書院

安田 章(1980)『朝鮮資料と中世国語』笠間書院

安田 章(1987)「捷解新語の改修本」『国語国文』56-3

安田 章(1991)「改修捷解新語 解題」『改修捷解新語』太學社 ソウル

参考資料

『パリ本 日葡辞書』(1976) 勉誠社

土井忠生他編訳(1980)『邦訳日葡辞書』岩波書店